



要点 1 歴史的仮名遣い・古語の意味

【解答】

1 次の古文と現代語訳の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

かかるほどに、宵うち過ぎて、^①子の時ばかりに、家のあたり、昼の明さにも過ぎて、光りわたり、望月の明さを十合せたるばかりにて、在る人の毛の穴さへ見ゆるほどなり。大空より、人、雲に乗りて下り来て、土より五尺ばかり上がりたるほどに立ち列ねたり。内外なる人の心ども、物におそはるるやうにて、あひ戦はむ心もなかりけり。からうじて、思ひ起こして、弓矢をとりたてむとすれども、手に力もなくなりて、萎えかかりたり。中に、心さかしき者、念じて射むとすれども、ほかさまへいきければ、あひも戦はで、心地、ただ痴れに痴れてまもりあへり。

立てる人どもは、装束のきよらなること物にも似ず、飛ぶ車一つ具したり。羅蓋さしたり。

〔竹取物語〕

現代語訳

こうしているうちに、宵も過ぎ、夜中の十二時ごろに、家の辺りが、昼の明るさより以上に、光った。満月を十も合わせたほどで、そこらにいる人の毛の穴さえ見えるくらいである。大空から、人が、雲に乗って下りて来て、地面から五尺くらい上がった高さのところに立ち並んだ。(これを見て、かくや姫の家の)内や外にいる人たちの心は、物のけにおそわれるような気持ちであって、戦い合おうという心もなくなった。やつのことで、気持ちを奮い起こして、弓に矢をつがえようとしても、手に力も入らなくなって、(体全体がしびれて)物に寄りかかってしまった。中に、気のたしかな者が、こらえて矢を射ようとしても、(矢は目標から外れて)よそのほうへ行つたので、戦い合うこともなく、気持ちがあひたすらにほんやりとするばかりで、(天人のほうを)じっと見つめているだけであつた。

立っている人たちは、その衣装の美しいことといったらたとえようもなく、飛ぶ車一つともなっている。うす絹で作った豪華な日よけ傘をさしている。

(1) 線の a 「十」、b 「さへ」、c 「おそはるるやうにて」、d 「からうじて」を現代仮名遣いに直し、すべてひらがなで書きなさい。

a とお

b さえ

c おそわるるやうにて

d からうじて

(2) 線①「子の時」とはいつですか。現代語訳の中から書き抜きなさい。

十二支で時刻が表されている。

夜中の十二時

(3) 古典では、物の長さや高さを表すのに、現代とは違う単位が使われます。この古文では、具体的な高さがどんな言葉で表されていますか。二字で書き抜きなさい。

尺＝長さの単位

五尺

(4) 線②「人」と同じ人々を表す言葉を、古文の文章中から探して書き抜きなさい。

「天人」を表す言葉をとらえる。

立てる人ども

(5) 線③「ほかさま」、④「まもりあへり」、⑤「きよらなる」、⑥「具したり」は、文章中ではどんな意味ですか。それぞれ書きなさい。

③ よその所

④ 見つめていた

⑤ 美しい

⑥ ともなっている



【解説】

要点 1 歴史的仮名遣い・古語の意味

① (1) eのほかは、現代でも使われている言葉なので、比較的わかりやすい。読むときの発音どおりに書くとよい。

a とをひとお (「を」を「お」にする)

b さへひさえ (「へ」をわ行音の「え」に直す)

c おそはるるやうにてひおそわるるやうにて (「は」を「わ」に、「やう」(ア段+う)を「よう」(オ段+う)に直す)

d からうじてひかるうじて (「らう」(ア段+う)を「ろう」(オ段+う)に直す)

ミスポイント aを「とう」と書きがちなので注意する。「十」は「オ段長音だが、オ段の仮名に「お」を添えて書く特定の語の一つである。cは直すべきか所が二つあるので見落とさないようにする。

(2) 昔は、十二支を用いて時刻や方角を表した。

参考

十二支で表す時刻と方位

「十二支」 子(鼠) 丑(牛) 寅(虎) 卯(兎) 辰(竜) 巳(蛇) 午(馬) 未(羊) 申(猿) 酉(鶏) 戌(犬) 亥(猪)



〔時間〕



〔方位〕

(3) 現代語訳の文章中に「地面から五尺くらい上がった高さのところ」(現代語訳4行目)とあるので、「五尺」が高さを表していることがわかる。

参考

尺貫法

現代はメートルやグラムなどの単位で長さや重さを表すが、以前は次のような単位が用いられていた。

○長さ 寸——約三センチメートル (尺の $\frac{1}{10}$)

尺——約三〇センチメートル (二〇寸)

丈——約三〇〇センチメートル (二〇尺)

間——約一八一・八センチメートル (六尺)

○重さ 匁——約三・七五グラム (貫の $\frac{1}{100}$)

貫——約三・七五キログラム (二〇〇匁)

*尺貫法は昭和三四年(一九五九)に廃止が施行されるまでわが国で通用していた。

(4) 線②の「人」は、「大空」から「雲に乗って下りて来た」のだから、天人すなわち『月の世界』の人々である。文章中の天人を表す言葉が答えとなる。文章中の「人」を表す言葉を拾い出し、その中から探してみよう。

A 在る人 (≡そこらにいる人) (2行目)

B 内外なる人 (≡内や外にいる人) (4行目)

C 心さかしき者 (≡気のたしかな者) (6行目)

D 立てる人ども (≡立っている人たち) (8行目)

前後の内容により、どれが最も「天人」らしいかといえば、「立てる人どもは」装束のきよらなること物にも似ず、飛ぶ車一つ具したり」と続くD。「土より五尺ばかり上がりたるほど」の空中に立ち並ぶ線②の「人」

と、このDの「立てる人ども」は、いかにも別世界の人々らしい不思議な性質を備えているという点で一致する。

(5) それぞれ、現代語訳の文章を照らし合わせて読み、古語の意味をつかむ。

④の「まもる」は漢字をあてはめるなら「目守る」であり、「見守る」の意味になるので注意。

⑤の「きよらなる」は現代語の「清い・清らか」に形も意味も近いが、「汚れなく美しい」という意味が強い。

⑥の「具す」は「同行させる・ともなう・身にそえる・取りつける」の意味を表す。現代では使われなくなった言葉である。

コピー・タイム

「竹取物語」は平安初期にできた最古の物語、「物語のいではじめの祖」と評価された古典である。にもかかわらず、超自然的な天人の力や飛ぶ車など、道具立てはかなりSF的。もっとも彼らは月の世界から来たのだから宇宙人だともいえ、SF的なのも道理だ。着ると物思いがなくなる天の羽衣や不老不死の薬といった要素から、この物語には月の世界への憧れがこめられているといわれる。だがしかし、羽衣を着たとたん翁をいとおしくかなしと思う心も失せて昇天していくかぐや姫——最後の最後の彼女にだけはとも親しみが持てなくはないか。苦悩はしても「心」を持つ人間であることの意義をふと考えさせられる物語である。



要点 2 古典文法の基礎

【解答】

1 次の古文と現代語訳の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

中将、人々引き具して帰り参りて、かぐや姫を、え戦ひとめずなりぬること、

こまごまと奏す。葉の壺に御文^①そへて参らす^②。ひろげて御覧じて、いとあはれがら

せたまひて、物もきこしめさず^③。御遊びなどもなかりけり。大臣、上達部を召して、

「いづれの山か天に近き」と問はせたまふに、ある人奏す、「駿河の国にある山^④

この都も近く、天も近くはべる」と奏す。〔竹取物語〕

現代語訳

中将は、人々を引き連れて（帝の宮殿に）帰参して、かぐや姫を戦つて（この国に）ひきとめることができなかつたことを、こと細かく帝に申し上げる。（かぐや姫が置いていった）不老の薬が入った壺に、かぐや姫の手紙□そえて帝にさし上げる。それをひろげて御覧になって、ひどくしみじみとした気分におなりになって、何もお食べにならない。音楽の演奏などもなかった。大臣や上達部をおよびになって、「どの山が天に近いか」とお問いになると、ある人が「駿河の国にある山が、この都にも近く、天にも近うございます」と申し上げる。

(1) 線①「御文」のあとに補つて訳すとよい助詞は何ですか。

(2) 線②～④の主語を次の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア 帝 かぐや姫 ある人

(3) 古文の文章中の□に入る言葉を次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア さへ なむ 連体形で終わる係り結び
ウ より こそ 已然形で終わる係り結び

要点 3 故事

【解答】

1 次の故事と現代語訳の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

虎、百獸を求めてこれを食らふ。狐を得たり。狐曰はく、「子敢へて我を食らふ

ことなかれ。天帝、我をして百獸に長たらしむ。今、子、我を食らはば、これ天帝

の命に逆らふなり。子、我をもつて信ならずとなさば、吾、子がために先行せん。

子、我が後に従ひて、百獸の我を見て、敢へて走らざるかを覩よ。」と。虎、もつ

て然りとす。故に遂にこれと行く。獸、これを見て皆走る。虎、獸の己を畏れて

現代語訳

虎は、すべての獸をえしきの対象としている。ある時、狐を捕らえた。狐が言うには、「あなたは、すすんで私を食べてはいけません。天の神は、私をすべての獸の王にさせている。今、あなたが私を食べれば、天の神の御意志に逆らうことだ。あなたが私を信じられないなら、私が、あなたのために先に立つて行きましょう。あなたは、私の後に従つて、すべての獸が私を見て□よく見なさい。」と。虎はもつともだと思つたので、とうとう狐の言うまま狐と歩いた。獸はこれを見て皆逃げた。虎は、獸が自分をおそれて逃げたのを知らなかつた。虎は、（獸たちが）狐をおそれている、と思つたのだ。

(1) 現代語訳の中の□にあてはまるものを次の中から一つ選び記号で答えなさい。

ア すすんで逃げるかどうかを なぜ逃げないかを

(2) この文章の話からできた故事成語として適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。「虎」と「狐」の出てくる話である。

ア 虎穴に入らずんば虎兇を得ず 虎は死して皮を留む

ウ 虎の威を借る狐 虎、ねずみに変ず



【解説】

要点 2 古典文法の基礎

① 線①を含む文の述語は「参らす（さし上げる）」。
これは人の動作を表す言葉なので、「御文」が主語とは考えにくい。「菓の壺に御文□そへて」という続き方から考えると補うべき助詞は限られてくる。

参考

一字の助詞一覧

- (格助詞) が・の・を・に・へ・と・で・や
- (副助詞) は・も
- (接続助詞) ば・と・が・し・て(で)
- (終助詞) か・な・ぞ・よ・ね・さ・の・わ

別解

「を」を補うのが最も自然であるが「も」を入れても意味的におかしくはないので「も」も認める。

(2) 動作の主体は、場面の様子をとらえ、そこにどんな人物が登場しているのかをつかんでから考えると間違いが少ない。また、敬語の使われ方も重要なヒントになる。

この文章は、かくや姫が月に帰ってしまった後のできごとを書いたものである。ア・エのうち文章中に実際に出てくるのは「帝」「中将」「ある人」の三人。このうち最も身分の高いのは、もちろん「帝」である。

② 参らす……謙譲語なので主語は「帝」ではない。前文と同じ人物が主語と考えられるので答えはウ。

③ きこしめさず……「きこしめす」は「飲食する」などの尊敬語。中将がさし上げた「御文」を「ひらげて御覧じて」「いとあはれがらせたまひて」「きこしめさず」となった人物なので、答えはア。

④ 奏す……謙譲語。同じ文中の「召して」問はせたまふは尊敬語で「帝」の動作だが、線④はその帝の問いに対する返答を申し上げたということなので、主語は「帝」ではない。同文中に「ある人奏す」とあるので、答えはエ。なお、「奏す」「と奏す」と、会話文の前後に「奏す」などがくり返されるのは古文特有の表現である。

(3) □を含む文の文末に注目。

駿河の国にある山□この都も近く、天も近くはべる。連体形

「はべる」は言い切り(終止形)が「はべり」。普通なら文末にあれば「はべり」の形で結ばれるはずの語である。それが連体形で結ばれている原因としてまず思いつくのは「係り結び」の法則。係り結びには結びが連体形になるものと已然形になるものの二種がある。連体形の結びを引き起こす助詞を、ア・エから選べばよい。

ぞ・なむ・や・か → 連体形
こそ → 已然形

(※要点編1年・15ページ ポイントレッスン)

要点 3 故事

① □には、原文の4行目「敢へて走らざるかを」の部分の現代語訳が入ることを初めにおさえない。

子、我が後に従ひて、百獣の我を見て、敢へて走らざるかを観よ。

これは、狐が虎に向かって言った言葉で、「子」は「虎」、「我」は「狐」を指す。「敢へて走らざるか」の主

体は「百獣」。つまり、「百獣」が「狐」を見てどうするのを「観よ」というのかを考えればよい。

5行目に「獣、これを見て皆走る」とあるので、「百獣」は「逃げた」とわかり、イ・ウを除外。アカウかは、文脈からも判断できるが、「敢へて」の意味が現代語訳2行目にもあるように「すすんで」と訳されることがわかれば、答えはアのほかはない。

ミスポイント 文章をあとのほうまで読みこまない

と、イヤウを選ぶ。空欄補充の問いは文脈の中で考える習慣をつけたい。

(2) 大陸には虎が生息しているせい、中国には「虎」が登場する話や言葉が少なくない。この故事もその一つ。虎を後に従えた狐を見て、獣たちが逃げたという話の内容から考える。「狐」の語の入っているウが正答。この故事成語が表す意味も覚えておきたい。

虎の威を借る狐

自分には力がないのに、他人の強い力を後ろだてにしていばる者。

なお、ア・イ・エの意味は次のとおり。

○ 虎穴に入らずんば虎兇を得ず 虎のすむ穴に入らなければ虎の子を得られない。危険をおかさなければ大きな利益は手に入らないとえ。(後漢書、班超伝)

○ 虎は死して皮を留む 虎が死後に美しい皮を残す意。人も死後名声を残すようにという意味。(十訓抄)

○ 虎、ねずみに変らず 強大な力を誇っていたものが急に小さくみすばらしいものになるという意味。君主もその権力を失うと、臣下から軽んじられるということをとえたもの。(唐、李白、遠別離詩)